# 中国白話小説研究における一展望（Ⅰ）

## ――明代短編白話小説集『三言』の研究とその分析を手掛かりとして――

勝山　稔

目　次

Ⅰ・序　論
（一）本稿作成の目的
（二）分析の方針
Ⅱ・本　論
一・三言の発見と書誌学考察
（一）三言の発見
（二）書誌学的検討の開始
二・三言所収の話柄に関する来歴及び成立時期の研究
（一）指摘される三言と宋代講釈及び話本との関係
小　結
（以下次号）

## Ⅰ・序　論

### （一）本稿作成の目的

一九一二年および一九二三～二四年、魯迅（周樹人）の『古小説鉤沈』及び『中国小説史略』（『史略』以下同）の初版本が発表されるに及び、中国の古典小説はようやく本格的に文学研究の対象に置かれるようになった。研究の蓄積はまだ百年に満たないものの、その若い研究分野という魅力と、優秀な研究者による積極的な学究活動により、多くの優れた研究成果を生み出した。その中でも明代天啓年間に馮夢龍により編纂された短編白話小説集『古今小説（喩世明言）』『警世通言』『醒世恒言』（総称「三言」[1]以下同）は、最初期から内外の学界で注目を浴び、短期的な盛衰があるものの、ほぼ常に小説研究の中心に位置し続けた作品の一つと言って過言はなかろう。

ところが、その三言研究の進捗が、ここ数年年小康の状態に入りつつあるように思われる。その原因は、大局的に見れば、今まで連綿と

積み上げられてきた研究が一定の成果をあげ、それが発達から熟成の段階に達しつつあることを意味するように思われる。また、もう一つとしては、鈴木陽一氏の研究をはじめとする今まで見られなかった新たな視点からの考察の模索や、将来への問題点を提示する動きも行われ始めている所からも【2】、三言研究、あるいは三言をも含めた白話小説研究自体も、一つの転機を迎えつつあるからではないかという感を強くする。

そのため本稿では、現時点までに蓄積されて来た三言研究の成果を整理し、分析を試みることで、まず現在までの研究を回顧し、その上で将来に向けての研究領域の可能性を展望してみることとしたい。

本稿の目的は、第一に、蓄積された三言研究の回顧と整理にある。先学の研究の参照には、研究史の整備が極めて有効であることは言を俟たない。しかしながら三言について言えば、所収各篇の本事に関わる論考を集成した小川陽一氏の労作【3】があるものの、その他に時代経過に沿った研究史の整理や三言全体を取り扱う網羅的な検討は、手附かずのまま放置されていると言わざるを得ない。ましてや三言は研究が長期にわたるため、膨大な先学の研究成果が多種の研究誌に言わば無秩序に散在し、網羅的な検討や体系的な整理作業が円滑に捗りにくい状況にあると思われ、このままでは将来の三言研究の進展に障害を生み出しかねないのではないか、と危惧したからである。

また第二の目的は、三言研究を一つの指針として中国小説研究の展望を試みることにある。それは三言研究の持つ課題と、白話小説研究が持つ課題とが往々にして重複（若しくは関連）する場合が見られるため、三言研究の事例を分析することが、白話小説研究のひとつの典型として、今後の研究の行方を模索するのに格好の材料となるのではないか、と推論したからである。

試みに三言研究が継続的かつ活発に行われた原因を挙げると、第一に、小説研究の創成期に内外で相次いで発見され、日中の学者が挙って注視したこと。第二に、作品自体が白話小説作品群の中で比較的初期に位置するため、現存する白話小説作品と都市繁昌記に見られる講唱文芸としての講釈との関係（両者の距離）が常に注視されたこと。そして、それが所収各篇の制作年代の問題と絡んで、古くは朝名や作品の風格から、次に書目・固有名詞の使用状況や語法的側面等様々な観点からの考察が企てられたこと。そして第三には、白話小説の読者（受容）層の問題を発端として、三言の編纂者馮夢龍を介した明代における出版文化の研究にまで進展したことが指摘されるが、かかる長期間にわたり旺盛に研究活動が行われた原因としては、取り組まれた研究課題の多くが、白話小説研究そのものが常に背負ってきた課題を多分に内在していると推測されるのである。それが小説研究全体と完全に合致するとまでは言わぬが、少なくとも三言の研究を介して、歴代の研究全般を俯瞰し、現在の解明せねばならない課題を洗い出し、見落とされてきた問題の提示を試み、将来への展望の一角を明らかにしようとすることは、決して的外れな企てとは思えないのである。

## （二）分析の方針

研究史の編集及びその分析の方針について、予め断っておく。本稿の狙いの最たるものは三言の研究史の整理にある。ただ単に研究の歴史を整理し紹介することに止めるのではなく、三言の研究活動に関わるマクロ的な視点から分析を試みることで、従来の研究分野が体系的・網羅的に行われてきたのかを逐一調査し、かつ、研究者が看過していた視点や問題の有無までも追究することとしたい。

また、研究史の編集には幾つかの類型があろうが、上記に示した本稿の性格の上からは、まず各研究者が、先に述べた三言研究の課題等の共通する「研究上の課題」をどのように認識した上でアプローチを試み、如何なる進展をもたらしたのかを纏め、その内容を読者の理解に資するように一括して記載することが妥当であろう。

そのために、研究内容からの分類を基底としながら、諸論考が「如何なる視点と手法を用いて考察を試みたのか」という研究上の視点や方法を重視した。

これを踏まえた上で、三言研究を概括すると、研究の視点から以下の通りに類別できると思われる。すなわち、

（イ）三言自体を研究対象とした研究

1・三言全体に関する研究

①三言の発見及び書誌学的研究

②所収の話柄に関する来歴及び制作時期の研究

③三言の編纂意図の研究（一部②に重複する）

④右記分類以外の三言全体に関する研究

2・三言の（形態的・内容的）特定部位に関する研究

①所収各篇の文学的研究

②三言の形態（正文・挿入詩詞・まくら）に関する研究

③語学的研究（一部②に重複する）

④右記分類以外の三言における特定部位に関する研究

（ロ）三言を介し他に研究対象を持つ研究

①三言等の小説作品を素材とした中国法制史研究

②三言や馮夢龍を介した出版文化研究

③社会史や風俗史・生活史等の三言の記事を援用した歴史学的研究

④右記分類以外の三言を介し他に研究対象を持つ研究

である。行論の便宜上三言の研究を以上の項目に類別し、特に先学の基礎を踏まえた研究が行われ、体系的研究と認められる分野を取り上げ【4】、原則的に発表年に従い、その論文によって（緻密化や新見解により）従来の研究に如何なる進展をもたらしたのかを中心に紹介したい。それは当然研究が恣意的・散発的な行為ではなく、体系的に蓄積が行われ深化すべき性格を持つものであり、殊に長期にわたる研究史の整理の場合には、尚更その性格に準拠した体裁を整えなければならないと考えたからである。

なお、本稿は紙数の都合上、分割して公刊することとしたが、それでも一部の考察を割愛しなければならなかった。ご了承願いたい。また、本文の記述は正確を期すため、可能な限り諸論考の記事を尊重し、或いは要約する場合には記事内容に忠実に則するよう配慮した。しかし、分野によっては門外漢ゆえの誤解や、それぞれの時代に研究者間で存在した問題意識や世論が不明確な点もあり（この種は文字として記録され難い）、説明が尽くされていない箇所も存在するかも知れない。これらについては研究諸賢の叱正を請う次第である[5]。

## Ⅱ・本　論

### 一・三言の発見と書誌学考察

長い間、三言は学界の謎であった。例えば一九二六年の時点で出版された中国小説の概説書を繙くと、左記の如き説明がある。

明末の小説に三言といふものがある。三言とは『喩世明言』『警世通言』『醒世恒言』の三種を謂ふ。これはいづれも馮夢龍の手に成ったものである。……右三言の中で、今日見得るのは、馮氏が最後に作った『醒世恒言』だけで、他の二言は容易に見られない。或は亡逸してしまったのかも知れない[6]。

と。このように、当時の学界では辛うじて『醒世恒言』が確認されるだけで、三言の完本は全く亡佚していたのである。

ただ、三言の存在そのものについては、関連する資料からおおよそ想像されていた。例えば明代崇禎年間に初刻された短編白話小説選集である『今古奇観』に見える姑蘇の笑花主人の原序には、小説の由来と『今古奇観』刊行に至る経緯が述べられているが、それには母体となった「三言」の名前が出てくる。つまり、

至有宋孝皇以天下養太上、命侍従訪民間奇事、日進一回、謂之説話人。而通俗演義一種、乃始盛行。……墨憨齋増補平妖、窮工極変、不失本末、其技在水滸三国之間。至所纂喩世・警世・醒世三言（傍点筆者以下同）。極摹人情世態之岐、備写悲観離合之致。……而抱甕老人先得我心、選刻四十種、名為今古奇観[7]。

とある。そこには南宋孝宗代に説話人を呼び寄せ口演させた由来の後に、墨憨齋は、編纂するところの喩世・警世・醒世の三言に至っては、人情世態の岐を写し尽くし、つぶさに悲観離合の有様を克明に筆写するようになった。そのため抱甕老人は我が心を得て四〇種を選刻し『今古奇観』と名付けた、とある。

このように『今古奇観』は三言（及び『二拍』）の選刻であることが知られていたものの、その三言は、中国で僅かに『醒世恒言』が認められるに過ぎず、由来する所の喩世・警世という二叢刻の所在は杳として知れなかった[8]。

## （一）三言の発見

ところが三言は、やや予想外と思われる所で、この世に再び現れ出ることとなった。

大正一四（一九二五）年、当時東京帝国大学文学部教授であった鹽谷温氏が支那小説史に関する講義の準備のため内閣文庫・宮内省図書寮・帝国図書館に教材収集をしていた所、内閣文庫から『全像古今小説』四〇巻及び『喩世明言（重刻増補古今小説）』二四巻、帝国図書館から『醒世恒言』四〇巻を偶然に発見した[9]。「偶然にも非常に珍奇な材料を見付けました。曩に宋元戯曲史を著しました王国維であるとか、また近く中国小説史を書きました北京大学の魯迅、周樹人氏などの未だ見ないと云ふやうな書物が、現に日本に伝わって居るのを見まして、驚き喜びました[10]」と、その詳細を大正一五（一九二六）年八月一日発行の『斯文』第八編第五号より発表、内外の学界に大きな衝撃を与えた。

衝撃はそれにとどまらず、異本の発見として拡がった。例えば辛島驍氏を中心に満鉄大連図書館から『警世通言』二八巻・『古今小説』四〇巻・『醒世恒言』四〇巻[11]を、片や長澤規矩也氏が尾州徳川家蓬左文庫から『警世通言』四〇巻[12]を相次いで発見すると、それに呼応するが如く中国でも馬廉氏蔵本『警世通言』並びに孔徳学校蔵『警世通言』三四巻[13]の発見が報じられ、鹽谷氏の発見後僅か三年間で実に「古今小説に二種、喩世明言に一種、警世通言に二種（外に清版二三種）、醒世恒言一種」の印本の存在が一挙に明らかになり[14]、一時は応接の暇がない程であったという[15]。当時の学界はまさに鹽谷氏の言葉の通り、「日中両国の文壇に溌剌たる元気を鼓舞し、万馬先を争うの盛観を呈した[16]」のである。

また、三言の発見は各種の白話小説の新発見という副産物を生み出した。例えば、明代嘉靖二〇年代（一五四一～五一）の刊行と推定され、三言より更に初期に位置する清平山堂洪氏刊本（『清平山堂話本』）、及び万暦年間（一五七三～一六一九）刊行の熊龍峯刊本（『熊龍峯四種小説』）を内閣文庫から発見[17]。次いで馬廉氏は寧波購入の残書から清平山堂刊本と同類と思しき一二篇（『雨窓集』『欹枕集』）[18]を、また銭杏邨氏も上海伝経堂から残欠二篇（「梅杏争春」・「翡翠軒」）[19]を発見。陸続と新発見の報告が寄せられ、現在まで至る短編白話小説研究の材料[20]は、ほぼこの時期に出揃うこととなったのである。

## （二）書誌学的検討の開始

さて、各地で発見された三言各刊版は、その発見の報告と共に既存する版との字句の異同や体裁の差違が認められ、諸本との校讎と、系統についての整理の必要性が指摘されるようになった。そのため三言の発見から数年が経過した頃から、各種の異本に関する書誌学的検討を試みる動きが活発化した。その活動の中心的な人物が、鹽谷氏の弟

子で後に書誌学研究の大家となる長澤規矩也氏である。

長澤氏は、まず発見された三言各篇と『今古奇観』及び日本翻刻篇【21】との対照【22】を試み、日本の主要蔵書庫である宮内庁図書寮・内閣文庫・蓬左文庫・静嘉堂文庫を精査し、所蔵の通俗小説の一覧を作成【23】するという基礎作業を行い、その上で長澤氏は発見された所の『古今小説』（天許齋刊本）、『喩世明言』（衍慶堂刊本）、『警世通言』（兼善堂刊本・衍慶堂刊本・三桂堂刊本）、『醒世恒言』（葉敬池刊本・葉敬溪刊本）・衍慶堂刊本）についての版本系統の基礎的な考察を図っている。その考察内容を簡略に列記すると以下の如きとなろう。（三言の刊本の中で同一人の手によって出版されたものは衍慶堂刊本以外伝わっていないので、この各本に共通する衍慶堂刊本を中心に説明したい）

まず『古今小説』と『喩世明言』についてであるが、内閣文庫所蔵衍慶堂刊『喩世明言』は「重刻増補古今小説」とあり、序文は天許齋刊『古今小説』をそのまま使用しているから天許齋刊を襲用したと思われるが、二四巻しかなく、口絵は本文と不一致な点もある。蓋し使える板木を寄せ集め印行したものと考えられる。

一方、大連図書館所蔵衍慶堂刊『警世通言』にも「二刻増補」とあり、実体は兼善堂刊『警世通言』を基礎とするが、その四篇（巻二三・二四・二七・二八）が欠如し、代わって天許齋刊『古今小説』の四篇（巻一六・一七・二五・二八）が補われている。従って衍慶堂刊本中『喩世明言』『警世通言』の二書は、衍慶堂が求板の上、複数の版を組み合わせて印行したものであり、その原板として内閣文庫所蔵天許齋刊『古今小説』及び蓬左文庫所蔵金陵兼善堂刊『警世通言』が使用された事が考えられる。

そして『醒世恒言』についてであるが、衍慶堂刊『醒世恒言』は明らかに清刻であり、他の衍慶堂刊『喩世明言』・『警世通言』よりも新しく、その現存数も多い。その一方葉敬池刊本の字体の一部に明代崇禎年間の刊本に多い字体が確認され、その意味から葉敬池刊本は衍慶堂刊本よりも旧いものと想像される。なお大連図書館に葉敬溪所刊『醒世恒言』が見えるが、これは葉敬池所刊の同版後印である。なお衍慶堂刊本の巻二三「金海陵縦欲亡身」を削除し、巻二〇「張廷秀逃生救父」を二巻に分け、巻二一「張淑兒巧智脱楊生」を巻二三に埋めたものも往々に見られる。

また『警世通言』には三桂堂刊本というものがあるが、北京孔徳学校及び馬廉氏所蔵三桂堂刊本の『警世通言』は清刊本であり、衍慶堂刊本より更に後のものである。三桂堂刊本は兼善堂刊『警世通言』を版下とし、かつ口絵は衍慶堂刊本より襲用したと思われる。また三桂堂刊本の中でも前記『舶載書目』著録本【24】→馬隅卿氏蔵本→孔徳学校所蔵本の順になる三種の印本を有する。

以上各刊本の検討の結果、三言の既見書の中で最古の版本は、『喩世明言』が内閣文庫所蔵衍慶堂刊本であり、『警世通言』が蓬左文庫所蔵兼善堂刊本、そして『醒世恒言』は内閣文庫所蔵葉敬池刊本であることを指摘している【25】。

その他にも長澤氏は、後に佐伯文庫【26】の残存本より『警世通言』の存在を発見、また尊経閣文庫蔵『古今小説』を報告、氏は重ねて「三言は初古今小説の名にて刻せられたるなるべく、天啓中、何人か三言の名に改めて翻刻したるなるべし【27】」と考え、天許齋主人が刊行した『古今小説』シリーズがいつの間にか明言・通言・恒言の三言に置き換わってしまったことを疑問として提示し、以後の『古今小説』の続編として刊行されたと推測される八〇篇が存在するのか否か。また三言に置き換えた張本人が誰なのか、またそれが天啓年間の何れの時期（若しくは天啓年間以前）に行われたのか、正確な所は未だ判明しないとしている。長澤氏は論考の中で出現が予想される版本を指摘し、原刻本の出現を期待したが、氏の求めた原刻初印本は未だ発見されていない。

また、これは三言に限る成果ではないが、孫楷第氏が一九三一年に二ヶ月間日本を訪問、東京所見の小説および大連図書館所蔵の小説を精査した成果を公刊【28】、三三年には更に中国側の小説材料をも集成した画期的な小説専門の書目『中国通俗小説書目』【29】を発刊したことは斯界では衆知のことであろうが、これも三言発見に端を発した影響の一つと言えよう。（なお、『中国通俗小説書目』は以後五七年及び八二年と改訂を加えているが、新出資料について網羅的に対応しきれていない面も否定できない。その必要から近年大塚秀高氏が増補改訂版を発表【30】、三言についても現時点までの整理が施され【31】、笹倉一広氏により書肆名索引も整備されている【32】。現在となっては、寧ろ大塚氏の増補版より参照すべきであろう。）

三言における書誌学的考察は、これら長澤氏による一連の考察の後、全く見られなくなる。三言に限定して言えば、近年になり漸く大塚秀高氏が佐伯文庫及び都立中央図書館所蔵の『警世通言』について【33】、また胡万川氏が台湾中央図書館所蔵本についての考察【34】を公刊したに過ぎない。

三言研究の書誌学的検討が一段落した後、論点は多岐に拡大することとなった。しかし、現在では書誌学的考察への関心が低下し、ややもすれば現在の三言研究の分野から等閑に附されかねない現状にあり、憂慮するべきであろう【35】。長澤氏の論考は、公刊した当時の検討しうる刊本にて解明出来る範囲を考察したのであり、長澤氏の考察により、全ての問題が解決したのではないことを特記しておかねばなるまい。

例えば『警世通言』の刊本は大きく三桂堂刊本（馬廉氏蔵本・北京孔徳学校蔵本・舶載書目著録本）・衍慶堂刊本（満鉄大連図書館蔵本）・兼善堂刊本（蓬左文庫蔵本）が存在するが、三桂堂刊は清刻本であり、衍慶堂刊本も衍慶堂が求版の上複数の刊本を組合せ印行した「二刻増補」に過ぎない。そして衍慶堂刊本の原版の一つであった蓬左文庫所蔵兼善堂刊本が検討の結果「最古の版」と認識されているが、それとて現存する刊本の上での最古に過ぎず、事実、兼善堂刊本も目次と本文と版心との巻数が一致しない所から、兼善堂刊本とて原刻本（若しくはより原刻に近い刊本）より改編した形跡が認められるのである【36】。つまりは現時点の長澤論文でも三言の刊行年や編纂過程には

未解明な面が極めて多く、内容もその時点に於ける暫定的なのものに過ぎず、仮に兼善堂刊本以前の版本が発見されると、或いは常識的に認識していた「三言」像も大きく変化しかねないことを常に認識しなければならないであろう。

## 二・三言所収の話柄に関する来歴及び成立時期の研究

新しく発見された文書や作品の性格を検討する場合、まず中国の歴代の中で「何れの時期に属するものであるのか」を判断することは史料調査の基本であろう。三言の刊行時期が明確となり書誌学的検討が一段落を向かえつつあった時期、三言に収める各篇が何時の頃に存在していたのか、という疑問が自ずと顕在化してきた。

### （一）指摘される三言と宋代講釈及び話本との関係

三言所収各篇の制作（若しくは話柄としての成立した）時期が取り分け論じられることとなる経緯は、三言という作品集の叢書的性格によるものと思われる。

例えば内閣文庫所蔵本『（全像）古今小説』【37】の見返しには書肆天許齋による説明があるが、それには、

小説如三国志・水滸伝、称巨観矣。其有一人一事、可資談笑者、猶雑劇之於伝奇、不可偏廃也。本齋購得古今名人演義一百二十種、先以三之一為初刻云。

とあり、後半部分に本齋は古今名人の演義一二〇種を購入し先ずその三分の一を初刻した、と「古今」の文字が見える。同じく、また書肆に提供する側にある馮夢龍の筆と考えられている緑天館主人の序にも「茂苑野史氏、家蔵古今通俗小説甚富、因賈人之請、抽其可以嘉恵里耳者、凡四十種、畀為一刻」とあり、茂苑すなわち蘇州の野史氏の家には、古今の通俗小説が非常に多く保存されている。賈人の要請があるため、その蔵書の中から、俗人の耳に有用なものをおよそ四〇種を抽出し、賈人に与えて一刻とした、と編者自ら「古今」の小説を編んだと記す点からも、所収各篇は編纂時点から既に制作年代がそれぞれに異なることが示唆されている。また各篇で設定された時代も宋・元・明代等広く分散する所【38】からも、三言所収各篇の成立やその作品を考察する場合、三言が編まれる以前の各篇の来歴を一つずつ検討する必要が認められた。そこで問題となったのが、三言の過半を占める宋代の話柄が「どのような根元から発生し、三言に編まれるに至ったのか」という問題であろう。そこで関連を指摘されていたのが宋代の講釈とのつながりである。

講釈との関係を示す資料を掲げると、『古今小説』原序に「若通俗演義、不知何昉。按南宋供奉局、有説話人、如今説書之流」と、通俗演義の若きは、何が淵源になるのか判然としないが、考えるに南宋では（お抱えの芸人の）供奉局に説話人がおり、それが今の説書の流れに

なったのであろう、と編纂者自身が推量しているように、白話小説の淵源が宋代を中心とする講釈に関係することを指摘しており、前に掲げた『今古奇觀』の序文にも、また『初刻拍案驚奇』原序にも「宋元時有小説家一種、多採閭巷新事、為宮囲承応談資」と、宋元に小説家が存在し、世間の珍しい話を取り上げ、宮中の茶話の相手をした、という同類の記事が認められたこと。また三言の篇中には、わざわざ題下に小字で「宋人小説題作碾玉観音（『警世通言』巻八）」「宋人小説題作西山一窟記（『警世通言』巻一四）」「宋本作錯斬崔寧（『醒世恒言』巻三三）」の如く、宋代の小説を類推させる注記を施すものも見られる所からも、白話小説は、宋代――それも説話人と称される講釈に淵源を持つことが認識されていた。また、更に当時有力な学説が存在したため、三言の存在は、その既成の学説の上に把握されることとなった。その学説が後に不朽の名著と称された魯迅の『中国小説史略』である。

講釈と小説の関係について、氏は『史略』[39]第一二編「宋之話本」の中で「（前略）在市井間、則別有芸文興起。即俚語著書、叙述故事、謂之平話、即今所謂白話小説者是也（二四八頁）」と説明している。敷衍すれば、市井の間には異なる文芸が興起した。すなわち俗語で書を著し物語を叙述するものである。これを『平話』と謂い、つまりは今で謂う所の『白話小説』がこれである、と説明している。

そして唐代における敦煌変文や、段成式『酉陽雑俎』（『続集』四「貶談」）等に言及した上で、「宋都汴民物康阜、游楽之事甚多。市井間有雑伎芸、其中有説話、執此業者曰説話人。（二五〇頁）」と、北宋の都・汴梁（開封）が物資・人口ともに多く娯楽も甚だ多かった。市井には様々な芸能があり、その中に「説話」があり、この職業に就く者を「説話人」と言った、と指摘する。そして耐得翁の『都城紀勝』や周密『武林旧事』巻六「諸色伎芸人」に見える説話記事から、宋代都市繁昌記に見える市井の芸能の一種たる講釈師の存在を指摘し、「説話之事、雖在説話人各運匠心、随時生発、而仍有底本以作憑依、是為話本（二五一頁）」と、説話は説話人が各々匠心を凝らし、その時に応じて臨機応変に演じるのであるが、やはり台本があって拠り所とした。それが「話本」であると説明する。また、講釈師の一種たる説話人の「底本（台本・稿本）」が「話本」であり、それが明代となり「話本」の形式を模倣して創作を試みた「擬宋市人小説（三四二頁）」つまり擬話本と称される白話小説[40]が生まれたのではないかと論述している。また日本においても、鹽谷氏の論考に、

> 三言を通観すると、其内容たる通俗小説が宋元より伝来の作者未詳なる所謂話本であることがわかる。之は三言の序文が、或は説書の源流を尋ね（古今小説）、或は説書の影響を詳述してゐる（警世通言）に徴しても明らかである[41]

と言及するように、白話小説は宋代に隆盛を博した講釈の底本や台本である所の「話本」と直截な関係にあるのであろうと想定し、三言の序文から話本が直接伝来したものと思われていた。この学説が当時の学界では定説として支配的立場となり、その後に話本の概念に修正を求めた論考[42]が発表されたが、魯迅の学説は再検討されることはなく、

以後も長く影響を与え続けたのである。また、『史略』によると三言は「因知此等滙刻、蓋亦兼採故書、不尽為擬作（三四三頁）」とあり、彙刻であることが知られ、恐らく旧い書からも併せて採り、全てが（明代の）擬作ばかりではないであろう、と考えられ、三言は話本と擬話本が混在した作品集と認識されていた。従って三言の当時の制作年代の考察はそのまま（宋代）話本＝（明代）擬話本を両極とする弁別に重点が置かれたのである。

制作時期特定へのアプローチは、①作中の朝名呼称からの考察・②文字風格からの考察・③私撰書目の著録状況からの考察・④時代により標記が異なる固有名詞からの考察・⑤三言題下の注からの考察、⑥語彙語法からの考察等の数種がある。これらの着眼点はほぼ全て、三言発見に間もない時期から手掛かりとして既に認識され、その後時期が降るにつれて考察の精密さを加えて行くという流れを持つ。以下、三言発見時期からの具体的考察の内容に言及するが、これは紙幅の都合上次号に譲ることとしたい。

【1】　通常、明代崇禎年間に凌濛初により編纂された『二拍』（『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』）を併せた『三言二拍』を慣用的に用いるが、編纂者と編纂意図とが異なり、その所収篇の性格も『三言』のそれと異質であることから、本稿では検討の対象から除外した。

【2】　代表的なもののみ掲げる。鈴木陽一「中国小説研究のニューウェーブ」（『中国古典小説研究動態』創刊号、一九八七）、中里見敬『中国小説の物語論的研究』（汲古書院、一九九六）、大木康他『新しい中国文学史――近代から現代まで』（ミネルヴァ書房、一九九七）、神奈川大学中国語学科編『中国通俗文芸への視座』（東方書店、一九九八）。

【3】　小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、一九八一）。

【4】　つまり三言研究には論考の蓄積が少なく研究史を形成しにくい分野もあり、これらを広く浅く検討に加えることは避けることとしたい。

【5】　なお本稿の基礎となる『三言』研究の収集については、既に別途拙稿「『三言二拍』『京本通俗小説』『清平山堂話本』関係論文目録（日文編・中文編）」（『論究』二五・二六号、一九九三～九四）を発表している。本稿と併せて参照していただければ幸いである。また拙稿「中国白話小説の挿入句について」（『論究』二七号、一九九五）末尾に目録の補遺があり、更にそれ以後に発見した関係論文については本稿で補うこととした。

【6】　宮原民平『支那小説戯曲史概説』（共立社、一九二六）、引用文は本書第一九章「明清の奇談集」二三九頁参照。

【7】　原文は上海図書館蔵本の影印である『古本小説集成　今古奇観』（上海古籍出版社、一九九二）を使用した。

【8】　日本でも清代に長崎へ舶載された書籍目録「舶載書目」の寛保三年の記事に「警世通言八本」を舶載した事実が発見され、日本への流伝が明らかになった。関西大学東西学術研究所資料集刊七「宮内庁書陵部蔵舶載書目（附内閣文庫蔵　分類舶載書目索引）（下）」（関西大学東

西学術研究所、一九七二）第五〇冊、寛保三年黠検書目、「亥一四番持用」

警世通言　八本

自昔博洽鴻儒。兼採稗官野史。而通俗演義一種。尤便于里之耳目。奈射利者而取淫詞。大傷雅道。本坊恥之。茲刻出自平平問主人手授。非警鰍世勧俗之語。不敢濫入。庶幾木鐸老人之遺憾。或亦士君君子所不棄也。

序　天啓甲子豫章無礙居士題。　三桂堂王振華謹識。

目　可一主人評

無礙居士較

第一巻　愈伯牙摔琴謝知音　第二巻　荘子休鼓盆成大道
第三巻　王安石三難蘇學士　第四巻　拘相公飲恨半山堂
第五巻　呂大郎還金完骨肉　第六巻　愈仲舉題詩遇上皇
第七巻　陳可常端陽僊化　第八巻　崔待詔生死冤家
第九巻　李謫仙醉草嚇蛮書　第十巻　銭舎人題詩燕子樓
第十一巻　蘇知縣羅衫再合　第十二巻　范鰍兒雙鏡重圓
第十三巻　三現身包龍圖斷冤　第十四巻　一窟鬼癩道人除怪
第十五巻　金令史美婢酔州秀童　第十六巻　張主管志誠脱奇禍
第十七巻　鈍秀才一朝交泰　第十八巻　老門生三世報恩
第十九巻　崔衙内鷄招姦　第二十巻　計押番金鰻産禍
第十一巻　趙太祖十里送京娘　第二十二巻　宋小官團圓破氊笠
第十三巻　樂小舎拚生覓喜順　第二十四巻　卓文君慧眼識相如
第二十五巻　桂員外途窮懺悔　第二十六巻　唐解元出奇玩世
第二十七巻　假神僊大鬧萃光廟　第二十八巻　白娘子永鎮雷峰塔
第二十九巻　宿香亭張浩遇鶯鶯　第三十巻　金明池呉清逢愛愛
第三十一巻　趙春兒重旺曽家荘　第三十二巻　杜十娘努沉百寶箱
第三十三巻　喬彦傑一妾破家　第三十四巻　王嬌鸞百年長恨
第三十五巻　况太守路斷死孩兒　第三十六巻　趙知縣火燒卓角林
第三十七巻　萬秀娘仇報山亭兒　第三十八巻　蔣淑貞刎頸鴛鴦會
第三十九巻　福禄壽三星度世　第四十巻　葉法師符石鎮妖

【9】　鹽谷氏はその他に帝国図書館所蔵『拍案驚奇』（三十六巻）・内閣文庫所蔵『二刻拍案驚奇』（三九巻附宋公明鬧元宵雑劇一巻）・東京外国語学校所蔵『今古奇観』（四〇巻）にも言及しているが、ここでは割愛する。詳細は鹽谷温「明代の小説『三言』に就いて（二）」（『斯文』第八編第六号、一九二六）二一～二八頁参照。

【10】　鹽谷温「明代の小説『三言』に就いて（一）」（『斯文』第八編第五号、一九二六）。引用文は同号雑誌五頁参照。なお鹽谷氏前掲書「明代の小説『三言』に就いて（二）」二八頁に見える「追記」の指摘によると、『三言』の中でも『醒世恒言』は当時既に内閣文庫に二部、帝国図書館・京都帝国大学図書館およびフランスパリの国立図書館（ビブリオテクナショナル）にそれぞれ一部を所蔵するとある。なおパリの国立図書館所蔵本は「喩世名言二刻」を題目とした呉郡宝翰楼刊本でP. Pelliotが『通報』（二四号、一九二五）に紹介、『斯文』（第九編第四号、一九二七）に「今古奇観に就いて」と題して抄録がある。

【11】 発見された『警世通言』は「大谷光瑞氏が満鉄に委託された小説戯曲方面の書籍一百八十余部の中から見出された（四三頁）」という。詳細は辛島驍「警世通言三種」（『斯文』第九篇第一号、一九二七）、同氏「満鉄大連図書館大谷本小説戯曲目録（上）（中）（下）」（『斯文』第九編第三～四号・六号、一九二七）。

【12】 長澤規矩也「『三言』『二拍』について」（『斯文』第一〇編第九号、一九二八。のち『長澤規矩也著作集（第五巻）』汲古書院、一九八五に所収）。

【13】 馬廉「明代之通俗短編小説」（『孔徳月刊』一・二、一九二六）同氏「関于白話短編小説『三言』『二拍』」（『語絲』一一一、一九二六、『斯文』第九編第四号に抄訳）。

【14】 引用文は長澤規矩也「『三言』『二拍』について（二）」（『斯文』第一一編第五号、一九二九。のち『長澤規矩也著作集（第五巻）』汲古書院、一九八五所収）六二頁参照。なお「古今小説に二種」とあるのは、内閣文庫所蔵天許齋刊本『古今小説』の他に前田尊経閣文庫所蔵『古今小説』を示していると思われる。前掲「『三言』『二拍』について（二）」では尊経閣文庫所蔵本について詳述していないが「大体に於いて、本書が内閣文庫所蔵本の覆刻本にして、而もなほ明末の版たるを失わざるは之を観る者誰も疑はざるべし（六二頁）」と推察している。また本稿に於ける長澤論文の引用頁は全て汲古書院刊『長澤規矩也著作集』によって統一した。

【15】 このように三言の発見当時は、各地から発見の報が間断なく到着する状況に加えて、発見当初の三言の研究者は、資料の対応や既出刊本との検討に追われる余り、「『三言』の発行所として緑天館と天許齋（以上古今小説）、衍慶堂（明言と恒言）、葉敬池（恒言）の関係が……全く解くことが出来ませぬ。……他日ゆっくり調べて見やうと思ひます（鹽谷氏前掲書「明の小説『三言』に就いて（二）」二〇頁参照）」とあるが如く概要の把握までしか及ばず、明らかになったことは、喩世・警世・醒世つまり三言の編纂を行った墨憨齋が馮夢龍であることの確認（馬氏前掲書「明代之通俗短篇小説」同氏「関于白話短編小説『三言』『二拍』」及び鹽谷氏前掲書「明の小説『三言』に就いて（二）」参照）、三言各篇の編纂時期が明代天啓年間と思われること（同氏「明の小説『三言』に就いて（二）」三八二頁参照）、また三叢刻がその数年間に順次発行されたなど本書の基本的性格を把握するに過ぎなかった。なお右の鹽谷論文では、三言の編者が墨憨齋であることが本文で前記するところの『今古奇觀』序文に、そして『新列国志』の見返しに「正史之外、厥有演義、以供俗覧、然亦非庸筆能弁。羅貫中小説高手、故三国志。与水滸並称二絶列国・両漢。僅当具臣。墨憨齋向纂新平妖伝、及明言・通言・恒言諸刻。膾炙人口、今復訂補二書。本坊懇請、先鐫列国及両漢。与凡刻迥別。識者弁之。」と明記される所から確認されるとしている。また管見では『初刻拍案驚奇』序文に「独龍子猶氏所輯喩世等書、頗存雅道、時著良規、一破今時陋習、而宋元旧種亦被蒐括殆尽」とあり、三言の編纂者が龍子猶・墨憨齋であることを示している。

【16】 鹽谷温「『醒世恒言』解題」（『全訳中国文学大系』東洋文化協会、一九五八）六頁参照。

【17】 長澤規矩也「『京本通俗小説』と『清平山堂話本』」（『東洋学報』一七巻二号、一九二八）なお熊龍峯刊本についても「万暦板俗本四種」として紹介される。また上記論考を同氏『長澤規矩也著作集（第一巻）』（汲古書院、一九八二）では「『清平山堂』『熊龍峯』刊行の話本に就いて」と改題し熊龍峯小説に関する考察が増補されている。

【18】 馬廉「清平山堂話本与雨窓欹枕集」（『大公報図書副刊』二二号、一九三四及び『国立北平図書館館刊』八一二、一九三四）小口に「雨窓集上」「欹枕集下」と墨書されているため、『雨窓集』『欹枕集』と呼称されるのは周知の通りであろう。

【19】 阿英「記嘉靖本翡翠軒及梅杏争春」（同氏『小説閒談』、上海良友図書印刷公司、一九三六）。

【20】 『三言』研究の前段階として『京本通俗小説』の存在を指摘しておく。『京本通俗小説』は一九一二年繆荃孫氏によって発表された八篇の小説集であり、その何れの篇も『三言』と重複したが、これは書誌学的検討の結果繆氏の偽作と判明したため、本稿では述べない。詳細は狩野直喜「支那俗文学史研究の材料（下）」（『芸文』七一三、一九一六）、鹽谷温「宋明通俗小説伝流表」（『斯文』第八編第九号、一九二六）、長澤規矩也「『京本通俗小説』と『清平山堂話本』」（『東洋学報』一七巻二号、一九二八）、黎劭西「『京本通俗小説』考評」（『努力学報』一号、一九二九）、李家瑞「従俗字的演変上証明京本通俗小説不是影元鈔本」（『大公報図書副刊』八六、一九三五）、そして長澤規矩也「『京本通俗小説』の真偽」（『安井先生頌寿記念書誌学論考』、松雲堂書店、一九三七）を参照のこと。

【21】 逐一掲示する紙幅がないため岡白駒・澤田一齋『小説精言』『小説奇言』『小説枠言』（ゆまに書房、一九七六）、中村幸彦編『近世白話小説翻訳集四・通俗醒世恒言』『近世白話小説翻訳集五・通俗今古奇観』（汲古書店、一九八五）、青木正兒校『通俗古今奇観（附月下清談）』（岩波文庫、一九三二）のみ掲げる。また鹽谷温「明の小説『三言』に就いて（三）」（『斯文』第八編第七号、一九二六）も参照されたい。

【22】 長澤規矩也「宋明通俗小説流伝表」（『斯文』第八編第九号、一九二六）。

【23】 長澤規矩也「日本現存戯曲小説類目録」（『文字同盟』七号、一九二七）。

【24】 長澤規矩也「伝奇四十種と小説三十種」（『斯文』第八編第六号、一九）、同氏「再び伝奇四十種と舶載書目との関係について」（『斯文』第八編第八号、一九二五。何れものち『長澤規矩也著作集（第一巻）』汲古書院、一九八二所収）一五七～一六〇頁参照。

【25】 内容の詳細は長澤氏前掲書「『三言』『二拍』について」、同氏「『三言』『二拍』について（二）」参照。

【26】 長澤規矩也・阿部隆一「佐伯文庫現存古書分類目録」（『佐伯藩政史料目録』佐伯教育委員会、一九七九）。

【27】 長澤規矩也「『三言』書名板本読考」（『書誌学』第一三巻第三号、一

九三九。のち『長澤規矩也著作集（第五巻）』汲古書院、一九八五所収）七五頁参照。

【28】孫楷第『日本東京所見小説書目』（一九三二初版、人民文学出版社、一九五八）、『大連図書館所見小説書目』（一九三二）。

【29】孫楷第『中国通俗小説書目』（一九三三初版、人民文学出版社、一九八二）また『三言』については同氏著「三言二拍源流考」（『国立北平図書館館刊』五―二、一九三一初稿、同氏著『滄州集』中華書局、一九六五）も詳しい。

【30】大塚秀高『中国通俗小説書目改訂稿（初稿）』（汲古書院、一九八四）それを全面的に増補改訂したものとして同氏『増補中国通俗小説書目』（汲古書院、一九八七）がある。

【31】大塚氏前掲書『増補中国通俗小説書目』九～一二頁参照。

【32】笹倉一広「『増補中国通俗小説書目』書肆名索引」（『中国古典小説研究動態』創刊号、一九八七）。

【33】大塚秀高「警世通言の版本について――佐伯文庫本と都立中央図書館本を中心に――」（『中国――社会と文化』創刊号、一九八六）、同氏「警世通言の版本について（補）」（『中国古典小説研究動態』創刊号、一九八七）。なお最近の動向として広沢裕介氏による研究報告「『三言』版本の問題点」（中国古典小説研究会夏季研究発表、於神奈川大学箱根保養所、一九九八）を参考に指摘しておく。

【34】胡万川「馮夢龍所編「三言」的版本流伝」（『中華文化復興月刊』九一六、一九七六）、同氏「関与三桂堂本警世通言第四十巻」（『中国古典小説研究専集』五号、一九八二）、また胡氏には「従馮夢龍編輯作的態度談所謂宋代話本」（『古典文学』二号、一九八〇）、「巴黎国家図書館蔵本『醒世恒言』」（『小説戯曲研究（第一集）』、一九八八）がある。

【35】長澤氏前掲書「『三言』『二拍』について」の序論にも「余……三言二拍の異本を索む。而も未だ想像しうる範囲内に於ける凡ての刻本を目睹し得るに至らずと雖も、或いはいふ、三言二拍の研究は已に尽きたりと。余謂ふらく、未だ至らずと（三九頁）」とあり、本稿作成時（一九二九）から、既に三言研究の主題が書誌学から遊離し始めていることが窺える。

【36】「然れども本書（筆者註…蓬左文庫所蔵兼善堂刊本『警世通言』）を以て原刻初印本と認めがたき理由は本書の目次・本文・版心の巻数が互に一致せず、版心の巻数亦時に文字に落ち着きを欠くることに存す。……即ち版心に従へば巻三十四は重複して巻三十九を欠く。巻数亦後来刪改の痕見え、概して匡郭も未だ完しとはいひがたければ、此本は決して初印本には非るなり（長澤氏前掲書「『三言』『二拍』について」四七頁）」。

【37】ここでは内閣文庫蔵天許齋刊本『古今小説』（上海古籍出版社、一九八七）を使用した。

【38】荒木猛「短編白話小説における新旧諸相の弁別――「『三言』中の固有名詞を中心として」――」（『集刊東洋学』三九号、一九七八）によれば、三言一二〇篇中、時代設定が明代となるのが二三篇、宋代四五篇、元代二篇、唐五代一七編、それ以前一〇篇（何れも明確なものの

み）とあり、宋代が最も多い。

【39】 テキストは『魯迅全集（第九集）嵇康集・中国小説史略』（人民文学出版社、一九七三）を使用した。邦訳には増田渉訳（『支那小説史』サイレン社、一九三五）、今村与志雄訳『魯迅全集11　中国小説史略・漢文学綱要』（学習研究社、一九八六）のち加筆して『中国小説史略（上・下）』（筑摩学芸文庫、一九九七）、他に中島長文訳『中国小説史略（1・2）』（平凡社東洋文庫、一九九七）がある。なお本文における原文引用箇所の頁数は人民文学出版社のそれを指す。

【40】 魯迅前掲書「第二一篇・明之擬宋市人小説及后来選本」三四三～三五三頁参照。

【41】 鹽谷温「中国小説の研究」（弘道館、一九四九）四二〇頁参照。また三言発見当初に著された「明の小説『三言』に就いて（二）」一四頁によると「（『三言』は）古今の小説中から編纂したものであります。中には宋元代以来の説話も少なからず伝わって居ることでありませう」とあり、魯迅の学説には触れていない。

【42】 増田渉『「話本」ということについて――通説（あるいは定説）への疑問――』（大阪市立大学『人文研究』一六号五巻、一九六五）。